

近藤保教授追悼

北海道大学触媒化学研究センター 教授 佃 達哉

分子研の研究顧問として多大なご尽力をいただいた近藤保先生が、さる5月25日にご逝去されました。かつての分子研のメンバーとして、また東京大学近藤研の第一期生として、心よりご冥福をお祈りいたします。近藤先生がクラスター科学の草分けとして先駆的な御業績を挙げられていることは今更申し上げるまでもございませんので、一門下生として近藤先生からいただいたご指導の思い出を披露させていただきます。



失礼ながら、「東大教授らしからぬ先生だな」というのが、卒研生としてお会いしたときの近藤先生の第一印象でした。福井謙一先生のノーベル賞や枡津耕三先生の名講義に感銘を受けて量子化学や物理化学を志していた当時の私にとっては、直感や感性をよりどころとした近藤先生の研究スタイルに正直なところ面食らうことがありました。教授室や喫茶店で、多量の冗談を交えながら学問・研究・音楽・文学・恋愛などについてお話をさせていただきましたが、研究の進め方や方向に関して「こうしなさい」と具体的に指示された覚えがありません。私の大学院での研究テーマが分子クラスターの電子付着に関する実験に決まるとすぐに、「佃君、面白そうな顔をしている分子を化学便覧から探してみてください」と言われました。そのときなんとなく選んだ分子がきっかけとなってクラスター内での負イオン重合反応という（私にとっては）思わぬ展開があり、結果的には博士号を取得することができました。「僕の役割は、君たちを手のひらにのせて本人がやりやすいように放つといてあげること、落ちそうにならない限り手を出さずに見守ってあげることなんです。手を出さずにも、本人には気づかれぬように真綿でじんわり締めるようにやるんですよ（笑）」とおっしゃっていました。我々学生が自分でも気づかない能力や個性が開花することを信じて、根気強く待ってくださっていたわけです。そうとも知らず、近藤先生が何を目標されているのかわからん、などと居酒屋で息巻いていた恥ずかしい夜もありました。また、こんなこともありました。分子科学若手の会の研究室紹介の資料として、メンバーの似顔絵（下図）や研究内容を四コマ漫画で描いてお見せしたときに、「特徴をよくつかんでいますね、漫画というアイデアは素晴らしいですね」とほめていただきました。ああ、こんなことでも自分の個性・能力の一つなんだな、と少しばかり自信がつかしました。

研究テーマについては面白ければ何をやっても良いという方針でしたが、絶対に許していただけないテーマもありました。すでに誰かが見つけ出した問題に答をだそうというような提案をしたときには、少し困った顔で「おっと……冴えませぬ」と絶句されました。こうなると、自主的に取り下げるしかありません。一方、不格好でも人と違うアイデアや新しい問題の芽が出そうな提案に対しては、人差し指を立てて体を上下に揺らしながら満面の笑みで「オット！」と興奮されていた様子が今でもありありと思い出されます。確かに、自分にしかできないことを見つけて、一度きりの研究人生を全うできればどんなにか幸せなことだろうと思います。卒業してからも、進むべき方向に迷うときは私の内なる近藤先生の声に耳を傾けています。

最後に、研究室を卒業するときに頂いた私の好きな言葉——「芸術は爆発だ 科学は感覚だ 金鉱掘りは辛抱だ」



分子科学研究所 所長 中村 宏樹

分子科学研究所の研究顧問をして頂いていた近藤先生が去る5月25日聖路加病院において急逝されました。以前から少しお具合が悪いとは伺っておりましたが、こんなに急に逝ってしまわれるとは……。暫く前にメールで、一寸具合が悪いので入院しますとの連絡を頂きました。「心臓は中々微妙だね……。でも、優れた医者に診てもらっていますから大丈夫です。大したことはありませんから、ご心配なく」とのことでした。人には心配を掛けまいとする何時もながらの気配りなので、話半分と受け取ってはいましたが、まさか、ここまで悪かったとは思っていませんでした。実際には、死の恐怖と戦っておられたのだと思うと、いたたまれなくなります。残念で、涙が止まりません。

個人的な思い出になりますが、私が近藤さんと——以降、今まで通り「近藤さん」と呼ばせてもらいます——始めて会ったのは1972年、アメリカのピッツバーグにおいてでした。私はその前1年間オハイオ州コロンバスにおり、ピッツバーグに引っ越して来ました。既にピッツバーグにおられた近藤さんに大変お世話になりました。極めて博識で人生経験豊かな近藤さんは、私にとっては正に頼りになる兄貴でした。色々な悩みごとの相談に乗ってもらい適切なコメントをもらったことが何度もありましたし、家族共々お付き合いいただきました。

近藤さんは、当時の原子物理の大御所であったFite教授のところで、水素原子ビームを用いた原子衝突の実験をされておりました。将来の研究計画としての表面やクラスターの研究の基礎なのでしっかりと身に付けるためだといわれており、大変感心したのを今でも鮮明に覚えています。このとき既に、近藤さんの頭の中に「クラスターのサイエンス」の構想がありました。2004年にドイツのフンボルト賞を受賞されていますが、その元はこの頃まで遡ります。今でこそ、大変盛んな分野となっていますが、近藤さんは、正に、クラスター科学の生みの親であります。

日本に帰国後は東大の朽津先生の講座の助教授として、その後は、ご自身の講座を担当され、文字通り多くの後継者を輩出すると共に大変活躍されました。その業績については改めて述べるまでもないでしょう。東大退官後は、今日に至るまで、豊田工大教授として豊田コンボン研クラスター研究室を引っ張ってこられました。まさに、コンボン研の理念に相応しい立派な研究室を立ち上げられました。昨今の大学の状況と比べてみると、羨ましい位の研究環境にあると思いましたが、勿論、それなりに色々な悩みがございましたことでしょう。しかし、近藤さんは大変アイデアに富んでいますし、何よりも、学問のあるべき姿、学術研究のあるべき姿について深い見識と哲学を持っておられました。この点でよく議論を行い、意気投合したものです。理論研究に関する見識と造詣も深く、Migdalの“Qualitative Methods in Quantum Theory”と言う本のことをよく話され、理論家である私の方が叱咤激励されたものです。我々の理論を正しく理解され評価してくださった数少ない実験家でもあります。

分子科学研究所としても長年に亘り大変お世話になりました。茅前所長の時には評議員として、そして私の時には研究顧問として若者を励ましていただきました。毎年、研究グループリーダーによる研究成果と研究計画の発表を行い、研究顧問の先生方に評価を御願ひしておりますが、「どういう学問的意義があるのか。独自性はどこにあるのか」と言う厳しい辛口のコментарをよく頂きました。昨今の、学術研究を軽視し技術的イノベーションに走りがちな些か乱れた時代において、正に貴重なご意見を多く頂き皆感動したものであります。

今の世の中の風潮を憂い、哲学の欠如を憂い、いつかまたじっくりと議論をしたいと思っていました。近藤さんもそのような時間が持てるようになることを楽しみにしておられたと思いますが、お互い、忙しいままに時が過ぎ、この様なことになってしまい、叶わぬ望みとなってしまいました。残念でなりません。

近藤さんは、いつか、自分は実は運命論者だと言っておられ、些かびっくりしたことがあります。我々は、決してこの急逝が運命だったなどと諦めることは出来ません。近藤さんの心は、魂は、ご家族は勿論のこと、我々の心の中に未永く生き続けます。

最後に、分子科学研究所の運営に関する多大な貢献に対して、改めて心よりお礼を申し上げます。近藤さん、やすらかに眠り下さい。合掌。